

優秀賞作品

総合政策学部国際政策文化学科3年

関 万葉(セキ マヨ)さん

希望は自分で作るもの

新型コロナウイルスは人生を生きる上で大切なことを教えてくれた。

筆者は現在インドネシア研究のゼミに所属している。このゼミを選択したのはコロナ禍以前、まだ1年の時であった。

1年の4月。「インドネシア語は簡単」という風の噂と、「何となく面白そう」という理由だけで第2外国語としてインドネシア語を選択した。授業でインドネシアの言葉や文化を学ぶうちに少しずつインドネシアという国に興味を持ち、7月にはField Studiesという学部のプログラムで1週間インドネシアに行った。そこでインドネシア、そして異文化の面白さを知った。常夏の島国。土のにおい。日本よりもずっと元気な街路樹。人々の笑顔。ジャカルタの大渋滞と郊外のゆったりとした街並み。馬車が走り、道端ではバイクの上で器用に昼寝をするおじさん。少し緯度と経度がずれた場所にこんな世界があったのか。この人たちはここでずっと生活を営んでいたのか。異文化への興味や好奇心が膨らんだ。

インドネシアについてもっと知りたい。東南アジアについてもっと知りたい。実際に現地を訪れ、見て、聞いて、感じて、それを仲間や教授と共有できるゼミがいい。その思いでこのゼミに入ることを決めた。1年の3月まではこれから始まるゼミ活動への期待と希望に満ち溢れていた。

しかし、2年になった瞬間、緊急事態宣言で学校が無くなった。1か月間授業が無くなり、楽しみにしていたゼミは1年間ほぼオンラインになった。目の前が真っ暗になった。インドネシアに行けない。海外に行けない。それどころか学校にも行けず友達にも会えない。ゼミの仲間とはオンラインの授業でしか顔を合わせられず、しばらく全員の名前と顔が一致しなかった。なんでこのゼミに入ったのか、ゼミにいる意味があるのか、何度も考えた。ゼミを辞め資格の勉強をするか、留学ができる国を探して留学に行こうかとも考えた。

心が曇ったまま前期が終了し、後期の1回目のゼミで、初めて直接ゼミの人々と顔を合わせた。学生たちの曇った表情を見て教授は「インドネシアに行けなかったら、海外に行けなかったら、君たちの希望は無くなるのか」という問いを私たちに投げかけた。その言葉を聞き筆者は、コロナ禍になって初めて自分の気持ちと本気で向き合った。自分は海外旅行がしたくてこのゼミに入ったのか。そうではない。異文化に興味を持ち、深く知りたいと思ったから、そして、仲間や教授と意見を交換したいと思ったから入ったのではないか。

自分と向き合い、ゼミを選んだ理由を改めて考えたことで、コロナ禍でもできることがある、そして

それは自分で見つけ、実践しなければならぬと気づいた。曇っていた心に光が差し込んできた。

そこから、以前から興味を持っていた「宗教とは何か」というテーマについて、イスラーム国家のインドネシアと日本での「祈り」の役割から考察し、ゼミの仲間と2人で学部内の研究発表会にオンラインで参加した。研究発表会に向けオンラインでのミーティングを繰り返し、インドネシア人や仏教の僧侶の方にインタビューもさせて頂いた。1つのテーマを様々な視点から考えたことで、自分自身の考え方や価値観も変化した。興味のあることについて調べ他者と意見を交換するという、自分の憧れていたゼミ活動ができることに感動すら覚えた。

2年の冬休みには「読書力」という本に出会い、本を読むことの大切さに気づいた。大学生にも関わらず本を読む習慣が無かった自分を恥じるとともに、大学生のうちに読書の大切さに気づけて良かったとコロナに感謝した。プラムディア・アナンタトゥールというインドネシアの文豪の長編歴史小説を自腹で購入し、インドネシアのオランダ植民地時代の人々の生き方や考え方に触れた。彼らが何に不満を抱き、何を支えに生きていたかなどを小説を通して知ることで、小説ではなく実際はどうだったのかなど教科書では習わない歴史の細部への疑問も生まれた。もし自分がこの時代に生まれていたらどう生きたか、今自分はどう生きるべきかなどについて考えるきっかけにもなった。

自分と本気で向き合い、自分が大学生活で何をしたいのか、何のためにゼミに入ったのかを考えたことで、研究や読書という光が差し込んできた。心の曇りを晴らしたのはコロナの終息ではなく、自分自身であった。

2年の夏まではコロナが「終わるまで」どう生きるか考えていた自分が、3年になる頃にはコロナと「共に」どう生きるのかという考え方で人生の選択を行えるようになっていた。3年の4月からは海外へ渡航できないからこそ国内に目を向け、外国人労働者の労働環境の問題について約1年間研究を行った。オンラインで聞き取り調査を行うなど、コロナ禍でも可能な方法で積極的に調査を行い、2年次以上に質の高い研究となった。

また、1年次のField Studiesで交流したインドネシアの学生とオンラインで交流できるプラットフォームも作った。日本語を学びたいインドネシア人の学生とインドネシア語を学びたい日本人の学生が、週1回程度オンラインミーティングの機能を利用して交流している。確実に1年次よりもインドネシアとの交流は増えており、パンデミックという危機がピンチとなるかチャンスとなるかは、自分の考え方や行動次第だと実感した。

いま、筆者には夢が2つある。

1つ目は、インドネシアに行くことである。コロナ禍でも希望を捨てずに活動できたのは疑いなく今のゼミに所属していたからであるが、唯一達成できていない、「実際に現地を訪れる」ということが大学生のうちに達成できたら、それ以上幸せなことではない。インドネシアの友人と直接会い、ゼミの仲間や教授と共に様々な名所を訪れ、その土地のご飯を食べ、文化や宗教に触れ、空気を肌で感じたい。

2つ目は、インドネシアとの交流クラブを中央大学の公認サークルにすることである。今のところクラブのメンバーはインドネシア人の学生が多く、日本人はゼミの仲間しかいない。このクラブが日本とインドネシアの架け橋になることを最終的な目標とし、まずは中大の学生がインドネシアに興味を持つきっかけとなるサークルを目指し活動を続けていこうと思う。今年の白門祭までに後輩に引き継ぎ、ナシゴレンなどインドネシア料理の屋台を出すつもりである。希望や計画は描けているので、形にできるよう努力する。

世界中の人々がコロナという危機に直面した中で、「危機に陥った時にどうするか」を2年間じっくりと考え、挑戦し、学ぶことができた。希望は自分で作るものであり、曇り空は自分で晴らすことができる。コロナから得た学びとそれによって得た成長は、就職活動にも、これからの人生においても役に立つと確信している。将来はインドネシアと日本を繋ぐ仕事がしたい。コロナがいつ終わるか分からないが、終息を待たずともそうした仕事は可能だと確信している。

人生に危機はつきもので間違いなく今後も訪れる。危機がピンチになるかチャンスになるかは自分次第である。それを教えてくれたコロナに、心から感謝している。

以上